

（6）審議事項

審議事項（1）第6期江別市スポーツ推進計画（素案）について
スポーツ振興担当主幹から、資料に基づき説明した。

○スポーツ振興担当主幹：

第6期江別市スポーツ推進計画（素案）について、説明する。

計画素案の説明に入る前に、第6期スポーツ推進計画において重要なテーマと考えていることを簡単に説明する。ポイントは、大きく2点ある。

素案の表紙にあるサブタイトルにも関係するが、1点目は、「いつでも、どこでも、だれでも、いつまでも」とあるように、あらゆる角度からスポーツ参画人口を増加させていく、ということ、もう2点目は、「健康都市えべつ」とあるように、スポーツと健康づくりの取り組みをどのように関連付けていくのか、ということである。

1点目のスポーツ参画人口の増加については、従来の、スポーツを「する」という視点に加え、新たに「みる」「ささえる」という視点を盛り込む。スポーツを応援する人や、選手を支える立場にある人も含めてスポーツ参画人口として考えいくとともに、「みる」「ささえる」立場にある人も取り込んでいくことで、来年開催されるラグビーワールドカップや、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの機運醸成、ボランティア参加などにもつなげていこうとするものである。

2点目のスポーツと健康づくりとの関連付けについては、主に健康福祉部との連携ということになるが、健康都市宣言を踏まえた市民の健康づくり、健康寿命の延伸に向けて、市の健康に関する施策との連携を意識した計画のつくりとしている。

引き続き計画の素案の内容について説明する。まず、3ページでは、昨年制定した「健康都市宣言」を新たに掲載した。

続いて、5ページ、6ページでは、計画策定の背景及び趣旨を述べている。この中では、先ほど申し上げた「スポーツ参画人口の拡大」について、5ページ下から4行目以降で触れている。

また、6ページの下から6行目以降では、健康都市宣言を背景とした、市民の健康づくりとスポーツの関連付けについても記載している。

7ページでは、計画の性格と期間、として、国や道の計画、自治基本条例や江別市総合計画等との関連について記載したうえで、第6期スポーツ推進計画の計画期間を掲載している。計画期間は第6次総合計画の後期の期間に合わせて、2019年度（平成31年度）から、2023年度までの5年間とする。

続いて、第2章、計画の基本的な考え方として9ページから11ページにそれぞれ記載している。

10ページの成果指標については、基本的に第5期の指標を引き続き使用する。なお、「週1回以上のスポーツ活動実施率」については、第5期では上向き矢印での標記であったが、第6期では具体的な数値を掲げた。これは、国が同様の項目について目標値を「65%」としていることを参考に、当市の現状値を考慮して設定したものである。

また、()書きで障がい者についても記載しているが、事前に障がい福祉係に確認したところ、このような数値を拾っているアンケート調査等はない、とのことであった。これについて、体育館の利用者内訳を整理する中で、障がい者手帳などの提示があった利用者数を集計していただいているということだったので、そのあたりの数値を利用して、指標管理ができないか、検討しているところである。

10ページ下段から11ページにかけては、施策体系を掲載している。これについては、前回2月の審議会で説明している。その後、具体的な施策を検討していく中で、若干表現など修正はあるが、基本的な部分は変わらないので、詳しい説明は割愛する。

続いて第3章、基本目標と基本方向について、13ページから始まる、I生涯スポーツの推進では、先ほど説明した、「どのようにしてスポーツ参画人口を増加させていくのか」という視点に立ち、年代ごと、領域ごとの取り組みの方向性を示している。

中でも体力低下の懸念がある青少年や、仕事・育児等で時間のとりにくい成人に対する働きかけが重要であるとする。

14ページ(2)青少年のスポーツでは、運動の習慣化、定着化を図ることと合わせて、サポート体制の充実にも触れていくこととしている。

次の15ページの(3)成人のスポーツでは、スポーツや運動に参加しやすい環境をつくること、多様な参加の機会をつくることを施策推進の方向性としている。

17ページからは、各領域の取り組みとしての施策を記載していて、17ページ(1)生涯スポーツ、18ページ(2)学校における体育・スポーツは、先ほど説明した、青少年と成人が主なターゲットとなる。

20ページでは、成果指標とも関連する「障がい者のスポーツ」への取り組みについて、その次の21ページでは新たな施策項目として「女性のスポーツ」について記載している。特に女性のスポーツに関しては、成人のスポーツとも重なる部分があるが、育児にかかる年代のスポーツ実施率が低いことに着目し、その部分に対してどのような働きかけを行っていくかが重要であるとする。

続いて22ページから始まる、II地域スポーツ活動の推進について、この章においては、市のスポーツ施策に関わる体育協会やスポーツ振興財団の取り組み、また、健康福祉部と連携した健康づくりを主眼に置いた施策について、主に記載をしている。特に注目していただきたい部分としては、まず、23ページ、「(2)地域スポーツを「ささえる」人材の育成・支援」として、各種のスポーツ活動を下支えしてくれている団体等に着目した施策を記載している。特に「育成母集団」として、これまで注目されていなかった、スポーツ少年団に参加している保護者などについても意識をした内容としている。

続いて27ページでは、「身近なところで競技スポーツを「みる」機会の充実」とし、ラグビーワールドカップや、東京オリンピック、パラリンピックを契機とした機会創出を念頭に、スポーツ参画人口の増加に向けた施策として記載をしている。

次に、健康づくりに関する取り組みとして、29ページから31ページにかけて記載しており、30ページでは、当市の健康福祉部が推進する「えべつ市民健康づくりプラン21」と連携して取り組みを進めていくことについて、記載している。このプランの中で、運動については、「今より10分多く動こう」をキーワードとしており、成果指標としているスポーツ実施率や、国の推奨する「30分、週2回以上の運動を1年継続する」といったことを課題・視点と捉えたうえで、気軽にスポーツをする機会の提供、充実を図っていこうとするものである。

31ページでは、「スポーツ・健康づくりに関する保健・福祉機関等との連携による相談体制の充実」とし、主には保健センターとの連携を意図した施策となっている。

最後に、Ⅲスポーツ環境の整備・充実であるが、32ページから33ページにかけて、スポーツ施設の整備、充実、活用、適切な管理について、それぞれ記載をしている。特に施設整備については、スポーツ課で懸案事項となっている部分であり、議会等でも、たびたび議論になってきたところである。

そのことを踏まえ「(2) 公共スポーツ施設の整備に関する具体的方針の策定」については、「いつまでに何をどうするのか」、もっと具体的には、青年センターのプールを今後どうしていくのか、ということを中心に、来年からの5年間の間で、何らかの方針を示していきたいと考えている。

(質疑等)

○議長（金内会長）：

ただいま説明があったが、山下委員から順番に意見を伺いたい。様々な場面でスポーツが重要だと感じるが、何かあるか。

○山下委員：

幼児のスポーツについては、各園・各施設において、常に遊ぶことがスポーツに親しむことに繋がっていると思う。しかし、幼児を抱えている保護者の方々は、運動の機会が必然的に少なくなる。幼児を抱える保護者の方々にどのようにして運動の機会を提供していくのか、こういった課題を解決するとなると非常に難しいのが現状だと思う。

○松田委員：

シニアのママさんバレーボールのチームが多くなってきており、その方たちは週2回活動を行い、全道大会を目指して、意欲的に取り組んでいる。そういった意味では、女性のスポーツも含めて、高齢者のスポーツについて非常に充実してきているのではないかと。

○立花委員：

北海道で健康増進計画を策定しており、昨年度中間評価をしたところ、運動習慣のある方の割合が減少しているという結果が出た。江別市だと、保健センターと一緒に健康づくり対策を進めているので、健康のことについて考えながらやっていきたい。

○袴田委員：

野幌総合運動公園には様々な施設があるが、プール利用の観点からみると、一般開放の平日の利用人数が少ない。その中でも65歳以上の高齢者の利用が多い。土日になると、小中学生のスポーツクラブの大会による利用が多い。

○小林委員：

小学校の親子レクで軽スポーツ出前事業を実施することが多いが、やっている時は親も子供も一生懸命、軽スポーツに取り組む姿勢が見られるが、継続してスポーツをする環境がないのが現状であり、課題だと感じる。

また、北海道スポーツ推進委員協議会が行われ、障がい者スポーツ関連のものに力を入れて取り組んでいこうという方向に決まった。全国で障がい者スポーツのリーダー養成講習会が行われているが、北海道からは今まで1人ぐらいしか行っていなかったが、3人程度参加することで、障がい者スポーツのリーダーを養成していく形をとっていこうという全道の仕組みができてきている。

○福田委員：

大麻東小近辺は公園が大きくて、外で遊んでいる子どもの割合が非常に多いと感じる。そのような環境に恵まれていることは素晴らしいことだと思う。スポーツ関係については、野球・バドミントン・バスケットボール・卓球等の少年団に入っている子どもたちがいるが、少年団になると競技という面が強い部分がある。少年団が発展すればするほど、スポーツを楽しんで継続するのが難しくなって、せっかく入っても辞めてしまったりする人がいる。小学生ぐらいまでは様々な遊びなり、スポーツなりを経験してもらいたい。

○北本委員：

スポーツをする施設や環境が足りないから、運動する習慣が身につかないのではないかと。すぐにかかできる問題ではないので、今は現状の施設で何とかするしかないと思う。

例えば、市内の小中学校の体育館の利用の管理をすることで、スポーツに触れ合う機会を提供するなどの方法があると思う。

現在、教員の中の働き方改革で、北海道から出ているアクションプランでは「部活動は週1回休みなさい・月1回土日のどこかで休みなさい」というように言われている。これは、今後競技スポーツと生涯スポーツを分けながら学校でやっていくという意味合いであり、部活動による競技スポーツだけではなく、生涯スポーツとして身近な生活の場にスポーツを取り入れていくことも重要である。

最近の子どもたちは少年団が強いと入りづらく、入ることをためらうケースが散見される。小さい時から体を動かすことが一番で、ただ遊ばせるだけではなくて、感覚を養ってあげるような遊びを取り入れることが重要になってくる。そのような要素を小学校体育や中学校体育で取り入れることで、生涯スポーツに繋がっていくのではないかと。

○原委員：

小学校、中学校とスポーツをやってきた生徒が多いはずなのに、高校の部活動の加入率が伸びていないのが現状である。小さい時から続けてきたスポーツの部活動に加入する生徒もいれば、新たなスポーツにチャレンジするために部活動に加入する生徒も一定数いるが、それと同じぐらい、家庭の経済状況などにより、アルバイトを始める生徒が増えたことが原因である。また、本当は部活動をやりたいが、学校の規定にそぐわない活動状況であれば廃部になることもあり、学校に部活動が存在しないという状況も増えつつある。さらに、学校の人事異動等により、競技の指導者がいない場合もあり、指導者の育成も今後の課題であると思う。

○花井委員：

スポーツ推進計画の中で、週1回以上のスポーツ活動実施率を現状の40%から60%になるように目標値を設定しているが、どの層をターゲットに上げていくのか。

○事務局（スポーツ振興担当主幹）：

ターゲットにする部分については、子育て世代のスポーツ活動実施率の低下がアンケートの結果として出てきているので、取り組んでいく重要項目であると考えている。例えば、スポーツ振興財団のほうで、親子で一緒に参加できるスポーツ教室やイベントの企画、実施をさせていただいているので、そういった機会を活用していきたい。

また、今回の計画のテーマであり、新しい取り組みの一つとして、「みる」「ささえる」部分も含めて、スポーツ参画人口にしていこうというところがあるので、これについては全ての世代が対象になってくるが、先ほど説明したボランティアであったり、「みる」ことからスポーツに興味を持っていただきたい。健康づくりの観点からみると、「毎日10分歩くようにする」「車ではなくて自転車で通勤する」といった部分もある意味スポーツ、運動の一環だということで健康づくりの切り口からも取り組んでいきたい。

○古川委員：

小学生、中学生でスポーツする子どもは増えているように感じる。子どもがスポーツを始め一番の要因は、テレビで見たり、親がやっているのを見ることである。子どもにスポーツを教える際は、まず見て興味を持ってもらうことが大事である。見ることで、子供たち自身が考え、作戦を練り、実際に体を動かすことにつながる。親がスポーツをさせようとするのではなく、子どもがスポーツをやりたいと思うような環境作りが非常に重要である。優れた指導者と地域が連携しながら、スポーツを推進することで子どもたちは活発に動く環境ができて育っていく。その上で競技スポーツとして、上の世界で頑張ろうと思う人が増えていけばいいと思う。

○議長（金内会長）：

様々な意見が出たが、ほかにないか。
なければ終わりたいと思う。